



## 矢嶋信男君の 早逝を惜しむ

参議院議員

伏見 康治

近頃お葬式に列することが極めて多い。この春だけでも、元学士院長有沢廣巳先生とか、原子力委員藤波恒雄氏とか、行政改革の土光敏夫氏とか、大先輩や同年輩の名士がどんどん亡くなっていくような感じがする。私は今年算え年で八十歳であるから、いくら高齢化社会といっても、先輩や同輩が亡くなって不思議はないが、しかし矢嶋君の突然の死は余りにも早過ぎた。昭和5年生れの由だから、いわゆる昭和一桁組みで、育ち盛りに栄養が行き届かず早死にするというのかも知れないがなどと、矢嶋君の桐ヶ谷の葬儀に列しながら考えていた。

これは昭和一桁の共通の性質ではなさそうに思うが、矢嶋君の理解の早さにはいつも感服させられた。学問の上でもそうだったし、対人関係でもそうだった。相手の思っていることが、言葉に表現されていない部分まで、すぐわかってしまわらしかった。それで矢嶋君は思いやりのある人として、誰からも好かれていたのではなからうか、しかしそれが当人に過分の負担をかけたということもあるかも知れない。男が仕事をする上では、邪魔物を排して突進することも必要なのだらうと思うが、矢嶋君にはそれができず、むずかしい問題を全部自分の責任として、引き受けてしまったというのではなかつたらうか。私にはこの矢嶋さんの性格が彼を早く死に追いやったのではなからうかと思われて仕方がない。

矢嶋君との個人的接触は、彼の大学院時代ではあったが、その頃の私は、当時の言葉で「関西研究用原子炉」の実現のためにエネルギーをとられて、いわゆる政治活動に明け暮れていた。宇治の火薬庫跡を候補地にしたことが失敗の出発点で、高槻、水無村、四条畷、……と転々して、最後に現在の熊取町に落ち着くまでの5年間、私はひどいめに会ったわけであるが、それで矢嶋君との接触も極めて稀薄なものであった。幸い私の第一の弟子にあたる内山龍雄教授の教育熱心は相当なもので、2講座分の学生を引き受けて頂いた形となり、矢嶋君も内山研所属というべきなのであろう。苦難の5年間の半ば頃から、私は核分裂から核融合へ徐々に転身をはかったが、その時に大いに私を助けてくれたのが矢嶋君であった。

東大の宮本梧樓研究室の大河千弘君あたりから、アメリカの制御核融合の秘密が近く解除されるという噂をきかされたのは、ずいぶん昔のことであったが、その内容について、スピッツァーがステラレーラーの考えを始めて公開講演したのを聞いてこられた澤田昌雄教授から教えて頂いたのは、矢嶋君と一緒にあった。この時私は、トロイダル磁場の磁力線を実際荷電粒子の描く軌道と考え違いして、矢嶋君にたしなめられたことを憶い起す。核融合の分野では矢嶋君の方が私の先生であった。

1961年、名古屋大学にプラズマ研究所ができて、私が所長になった時矢嶋君はよろこんで、名古屋へ助手としてついてきてくれた。そしてプラズマ研究所の、特に理論部門の建設に努力してくれた。谷内俊弥教授の非線形波動の独創的な研究は矢嶋君に大きな影響を与えたと思う。——矢嶋君は名古屋で新家庭を築き上げ、夫人はタイピストとして大いに夫君を助けていたことも憶い出される。

矢嶋君が京大に移ってからは、去るものは日に遠くの感がなきにしもあらずであったが、プラズマ研究所は共同利用研究所であるから、相当しばしば、色々な会合に参加してくれ、その度に久闊の辞を交したものである。

私が停年退職するのに前後して矢嶋君は九州大学の応用力学研究所の教授になった。私は東京に帰る積りで、それがかなわず、横浜にアパートを見付けたが、これで矢嶋君との距離は大変大きくなったかと思ったが、心理的には却って近付いたのかも知れない。応用力学研究所が春日地区へ移転した頃には、それを見学するように招請を受け、夜はお宅で夫人の手造りの御馳走になった。それは日本学術会議の会長をしている頃であったと思う。昨年秋には参議院科学技術特別委員会の議員派遣と称する見学会で、九州北部を廻ったとき、役人の作ったプログラムに私は応力研を付け加えさせて特に伊藤教授の作った超伝導トカマクを見学したが、これができるまでには、所長としての矢嶋君は相当苦労しただらうと想像した。

そしてこの春には、珍しく季節の挨拶状が舞いこんできて、嬉しいと共に、いぶかりもした。殊によると、矢嶋君はその頃から何か死の予感を持っていたのかも知れない。だらしのなかつた指導教官でも、何か愛情だけは持っていただけかと思つて、胸がきしむ。

矢嶋信男君、心安らかに眠って下さい。

(1988年9月5日受理)